

クオリア表象理論と色のハードプロブレム

若林佑治

東京大学総合文化研究科

本研究発表の目的は、クオリア表象理論が直面する問題の1つとされる色のハードプロブレムへと応答し、それがクオリア表象理論にとって問題とならないことを示すことである。

私たちの意識経験には主観的な側面であるクオリアが伴う。たとえば、赤いりんごの視覚経験の場合、そこには「赤を見るとはどのようなことか」という表現で表すことができるような、赤のクオリアが伴う。

クオリアを唯物論の枠組みの中で説明しようと試みるのが、クオリア表象理論である（この理論を支持する代表的な哲学者は、ハーマン(Harman, 1990)、ドレッスキ(Dretske, 1995)、タイ(Tye, 1995, 2000)である）。クオリア表象理論によれば、クオリアとは意識経験における表象内容である。赤いりんごの視覚経験は、赤いりんごを表象内容として持つと考えられる。したがって、赤いりんごの視覚経験に伴う赤のクオリアは、その経験によって表象された赤いりんごが持つ、赤いという性質と同一になる。赤いりんごが持つ赤いという性質は、りんごという物体の表面が持つ物理的な性質であると考えられるため、クオリア表象理論によって、赤のクオリアが唯物論の観点から説明されることになる。他のクオリアに関しても同様のことが言える。

クオリア表象理論が直面すると考えられる問題の1つが、色のハードプロブレムである(Byrne, 2006)。クオリア表象理論によれば、色のクオリアとは表象された物体の表面が持つ物理的性質である。したがって、色は物体の表面が持つ物理的性質だということになる。そのような性質の候補となるのは、物体表面の反射特性であると考えられる。しかし、一見したところ、色と物体表面の反射特性が同じ性質であるように思われない。色のハードプロブレムとは、物体表面の反射特性がいかにして色でありうるのかという問題である。クオリア表象理論は、この問題に答えることができなければならない。

色のハードプロブレムへの応答の手がかりとなるのは、ラッセル的内容とフレーゲ的内容と呼ばれる2つの表象内容の区別である。表象内容には、ラッセル的内容とフレーゲ的内容という2つの内容があると考えられており、クオリアとラッセル的内容を関係付ける立場はラッセル的表象主義、クオリアとフレーゲ的内容を関係付ける立場はフレ

レーゲ的表象主義と呼ばれる(Chalmers, 2004)。ラッセル的内容とは、表象される対象やその対象が持つ性質によって構成される内容である。たとえば、赤いりんごの視覚経験の場合、りんごという対象と、りんごが持つ赤いという性質や丸いという性質が表象されていると考えられる。したがって、赤いりんごの視覚経験のラッセル的内容は、りんごと、りんごが持つ赤いという性質や丸いという性質によって構成される内容となる。一方、レーゲ的内容とは、提示様式もしくは提示様式によって構成される内容であり、提示様式とは、表象される対象や性質を決定するための条件である。たとえば、赤いりんごの視覚経験の場合、りんごが表象されるためには、その経験がりんごによって引き起こされていなくてはならないと考えられ、赤いという性質や丸いという性質が表象されるためには、通常の場合のもとで、それらの性質がこれまでに赤のクオリアや丸さのクオリアを伴う経験を引き起こしてきていなくてはならないと考えられる。したがって、赤いりんごの視覚経験のレーゲ的内容は、「この経験を引き起こしている物体は、通常の場合のもとで、赤のクオリアや丸さのクオリアを伴う経験を引き起こす性質を持つ」となる。本研究発表では、ラッセル的表象主義の立場を支持し、ラッセル的内容とレーゲ的内容の観点から、クオリア表象理論が直面する問題の1つである、色のハードプロブレムへと応答し、それがクオリア表象理論にとって問題とならないことを示す。